

二〇〇一年三月四日 (夕拝)

初めに神が(一)

創世記一章一節～五節

創世記一章一節～二章三節には、神さまの天地創造の御業が記されています。今日は、この天地創造の御業の記事の意味を理解するために、この記事が創世記全体の中でどのような位置を占めているかについてお話しします。

創世記は、一般に、「経緯」、「歴史の記録」、「由来」などと訳されている、トーレドートという言葉をとまなう句によって区分されています。聖書の中ではこの言葉は「何々のトーレドート」というように構成形で出てきます。ここでは、便宜上、この、「トーレドート」という言葉をともなう句のことを、「トーレドート句」と呼ぶことにしましょう。

創世記の中でセクションを区切るものとしてのトーレドート句は、十一回出てきます。それを列挙しますと、次のようになります。

第一は、二章四節の、

これは天と地が創造されたときの経緯である。

第二は、五章一節の、

これは、アダムの歴史の記録である。

第三は、六章九節の、

これはノアの歴史である。

第四は、一〇章一節の、

これはノアの息子、セム、ハム、ヤペテの歴史である。

第五は、一一章一〇節の、

これはセムの歴史である。

第六は、一一章二七節の、

これはテラの歴史である。

第七は、二五章一二節の、

これはサラの女奴隷エジプト人ハガルがアブラハムに産んだアブラハムの子イシユマエルの歴史である。

第八は、二五章一九節の、

これはアブラハムの子イサクの歴史である。

第九は、三六章一節の、

これはエサウ、すなわちエドムの歴史である。

第十は、三六章九節の、

これがセイルの山地にいたエドム人の先祖エサウの系図である。

そして、第十一は、三七章二節の、

これはヤコブの歴史である。

です。

その他、トーレドートという言葉自体は、一〇章三二節、二五章一三節にも出てきます。

このトーレドートという言葉は、一九世紀初めに、ヘブル語とアラム語のレキシコンとヘブル語の文法書を著した、ゲゼニウスの頃から、「歴史」とか、「物語」、また、家族などの「系図の記録」として理解されています。

また、旧約聖書のギリシャ語訳である『七十人訳』は、この言葉にゲネスイスを当てています。これが、マタイの福音書一章一節の、「イエス・キリストの系図の書」（直訳）に用いられています。これは、創世記五章一節の「アダムの歴史の記録」の反映と考えられます。（R.K.Harrison, Introduction to the Old Testament, Grand Rapids: Erdmans, 1969, p. 546., N. B. D., p. 460.）

創世記の構成にとって、このトーレドート句が重要な役割を果たしているということは広く認められています。このトーレドート句がどのような意味で用いられているかについては、意見が分かれています。

R・K・ハリソンは、このトーレドート句は、これに先立つ部分に結び付けられる、「結びの句」であると理解しています。（Harrison, pp. 543 547.）そして、ハリソンは、トーレドート句が、多くの場合に「導入句」であると理解されているのは、創世記の多くのセクションが、古代文書の例にもれず、系図によって始まっているところから、単純に、トーレドート句も、その系図で始まる部分の導入句であると考えられたためであると述べています。（ハリソンの理解の先駆者は、ワイズマンです。 P. J. Wiseman, New Discoveries in Babylonia About Genesis Marshall: Morgan & Scott, 1936）

ハリソンは、また、S・R・ドライバー等の、「誰々のトーレドート」と言

われているのは、その人物が系図の流れを区分するのに重要な人物であるからであるという主張を退けています。その際、創世記において最も重要な人物である、アブラハムがトーレドート句に入っていない一方で、それほど重要ではない人物が、トーレドート句に入れていることを指摘しています。この「それほど重要ではない人物」とは、三六章一節と、三六章九節で取り上げられている、エサウのことでしょう。

その上で、ハリソンは、

しかし、明らかなことは、そこに関わる人物に関する主要な事実は、この問題の句「トーレドート句」の前に記録されていることであり、その後は記録されていないことである。

と述べています。そして、その例として、創世記五章一節の「アダムのトーレドート」、二五章一九節の「イサクのトーレドート」、そして、三七章二節の「ヤコブのトーレドート」を挙げています。(P.545・さらに、p.546では、二章四節も、その前に記されている部分を指していると言っています。それは、それ以下に記されている記事が、天の創造を含んでいないことによって分かると言っています。)

*

トーレドート句が、その前の部分の「結びの句」であるという見方にはいくつかの問題があります。

第一に、トーレドート句は創世記以外にも用いられています。たとえば、民数記三章一節では、

主がシナイ山でモーセと語られたときのアロンとモーセの系図は、次のとおりであった。

と言われています。

これは、少し長いですが、全体をトーレドート句と見ることができます。これに先立つ二章には、イスラエルの民が氏族ごとに宿営するために定められた宿営の順序と登録された人数などが記されています。それで、三章一節のトーレドート句は、それに先立つ二章に記されていることをまとめる「結びの句」ではなく、続く三章二節に、

アロンの子らの名は長子ナダブと、アビフと、エルアザルと、イタマルであつた。

と記されていることから始まる部分を導入する「導入句」であると考えられま

す。

また、ルツ記四章一八節～二二節には、

ペレツの家系は次のとおりである。ペレツの子はヘツロン、ヘツロンの子はラム、ラムの子はアミナダブ、アミナダブの子はナフシヨン、ナフシヨンの子はサルモン、サルモンの子はボアズ、ボアズの子はオベデ、オベデの子はエッサイ、エッサイの子はダビデである。

と記されています。

この部分の初めには、

ペレツの家系は次のとおりである。

というトーレドート句があります。これも、それに続いて記されていることへの「導入句」です。

これらのことから、トーレドート句が常に「結びの句」であるわけではないことが分かります。

第二に、トーレドート句を結びの句とすると、意味が通るようになると思われる個所がある一方で、そのようにすると、おかしくなってしまう個所もあります。

創世記の記事の中で見てみますと、二五章一二節には、

これはサラの女奴隷エジプト人ハガルがアブラハムに産んだアブラハムの子イシユマエルの歴史である。

と記されています。このトーレドート句が結びの句であるとしみますと、これに先立つ一一章二七節後半～二五章一一節の結びの句であることとなります。ところが、一一章二七節後半～二五章一一節に記されているのは、アブラハムの生涯です。これでは、アブラハムの生涯が、「イシマエルのトーレドート」として結ばれることになってしまいます。

同じように、二五章一九節には、

これはアブラハムの子イサクの歴史である。

と記されています。しかし、この前の二五章一三節～一八節には、イシマエルの子たちのことが記されています。これを結びの句としますと、イシマエルの子たちのことが、イサクのトーレドートとして結ばれることとなります。

また、三六章一節には、

これはエサウ、すなわちエドムの歴史である。

と記されています。ところが、これに先立つ二五章一九節後半～三五章二九節

には、イサクと、その二人の子であるエサウとヤコブのことが記されています。

さらに、三七章二節には、

これはヤコブの歴史である。

と記されています。ところが、この前の三六章一〇節～三七章一節に記されているのは、エサウの子孫のことです。

*

これらのことから、創世記に出てくるトーレドート句を、それに先立って記されている部分の結びの句であることに無理があることが分かります。それで、創世記に出てくるトーレドート句は、それに続く部分への導入句であると考えたほうがよいと思われます。

ただし、トーレドート句が、そこに出てくる「人物」あるいは「もの」の「起源」や「由来」を表わす導入句であるとし、意味が通らなくなってしまう。

けれども、トーレドート句によって導入される記事が、トーレドート句に出てくる「人物」あるいは「もの」にかかわること、すなわち、その人の家族や、その人の生きた時代のことなどが、「その人物の子孫」あるいは「それから出たもの」に記することを記していると考えますと、創世記の中のトーレドート句は、すべてうまく説明できます。

大切なことですので、改めて確認しておきますが、トーレドート句によって導入される記事は、トーレドート句に出てくる「人物」あるいは「もの」の「起源」や「由来」を記しているものではありません。それは、トーレドート句に出てくる「人物」あるいは「もの」にかかわることが、その子孫など、それから出たものに関することを記していると考えられます。

このことは、二章四節～四章二六節に記されている記事の基本的な意味を理解するための光となります。この記事を導入する二章四節には、

これは天と地が創造されたときの経緯である。
と記されています。

ここで「経緯」と訳されている言葉が、トーレドート句です。これまでお話ししたことのかかわりで言いますと、このトーレドート句によって導入されている二章四節～四章二六節に記されているのは、「天と地」の起源や由来ではありません。その意味で、それは、いわゆる「もう一つの天地創造の御業の記事」ではありません。そこに記されているのは、神さまによって創造された

「天と地」にかかわることです。特に、その中心である「神のかたち」に造られている人間のことで、

*

さて、一つの問題は、なぜ、一章一節～二章三節にトーレドト句がないのかということですか。

これについては、先ほどお話ししたトーレドト句の意味を念頭に置きますと、理解することができます。

トーレドト句は、何かの「起源」や「由来」を述べる記事への導入としては用いられません。ところが、一章一節～二章三節の記事は、この世界のすべてのものが神さまの天地創造の御業によって造られたということを書いてあります。つまり、この世界のすべてのものの「起源」や「由来」を記しています。それで、一章一節～二章三節の記事には、トーレドト句を導入句として用いることができません。

このことは、

初めに、神が天と地を創造した。

という言葉によって導入される一章一節～二章三節の記事が、その後に記載されている、一連のトーレドト句によって導入される十一の記事とは、異なった性格をもっていることを意味しています。

初めに、神が天と地を創造した。

という言葉によって導入されている一章一節～二章三節では、すべてのものの「起源」が記されています。そして、すべてのものが、神さまの創造の御業によって始まったことを示しています。これに対しまして、一連のトーレドト句によって導入される十一の記事は、どれも「起源」を記すものではありません。

このことと関連して、「初め」というものの大切さに注意したいと思います。

「初め」を表わすギリシャ語のアルケーという言葉は、「初め」を意味するとともに「原理」をも意味しています。これは含蓄のあることで、「初め」がどのようなものであったかが、そのものの、その後の在り方にとって基礎的な意味を持っています。その意味で、

初めに、神が天と地を創造した。

という言葉によって導入される一章一節～二章三節の記事は、それに続く、一連のトーレドト句によって導入される記事のすべてにとっての基礎となっ

ています。その一連のトーレドト句によって導入される記事は、「神のかたち」に造られている人間の歴史（厳密に言いますと、後ほどお話しします「救済史」）を記していますが、それは、

初めに、神が天と地を創造した。

という言葉によって導入されている、神さまの創造の御業によって確立されている原理的なものによって、根本から律せられているのです。

このように、すべてのものの「初め」である、神さまの創造の御業について記している、一章一節～二章三節は、その後続く一連のトーレドト句によって導入される記事のすべてにとつての基礎であり、その後の、トーレドト句によって導入されるすべての記事は、その上に成り立っています。それらの記事は、神の御手によって支えられ、導かれている「歴史の記録」であることを意味しています。

*

すでにお話ししましたように、

これは天と地が創造されたときの経緯である。

というトーレドト句によって導入される二章四節～四章二六節の記事は、「天と地」の「起源」のことを述べるものではありません。その意味で、これは、「もう一つの天地創造の御業の記事」ではありません。

厳密な意味での天地創造の御業の記事は、一章一節～二章三節の記事です。二章四節～四章二六節では、すでに一章一節～二章三節に記されている、天地創造の御業によって造り出されたこの世界にかかわることとして、その中心に置かれている「神のかたち」に造られている人間の在り方に焦点を合わせて、その「歴史」が記されています。

二章四節以下に「もう一つの天地創造の御業」の記事があるとする立場では、二章四節以下を二章二五節で区切らなくてはなりません。しかし、創世記の構造から言いますと、それは、そこで区切られるのではなく、次のトーレドト句の前である四章二六節で区切られます。

この点からも、二章に触れられている創造の御業は、一章一節～二章三節の記事のように、すべてのものの「起源」を記すという観点からではなく、造り主である神の御前における人間の位置や存在の意味を明らかにし、そこから、人間がどのように墮落してしまったか、同時に、神である主の恵みの備えがどのように示され、信じられ、受け継がれていったかを示しています。

このように、

初めに、神が天と地を創造した。

という言葉によって導入される一章一節～二章三節に記されている天地創造の御業を基礎として、一連のトレードト句によって導入される十一の記事が記している歴史が展開していきます。

一連のトレードト句によって導入される十一の記事は、一つの中心主題によって貫かれています。それは、二章四節のトレードト句によって導入される二章四節～四章二六節の記事において示されています。

「神のかたち」に造られて、主とのいのちの交わりのうちに生きていた人間は、誘惑する者の声にしたがって、神である主に対して罪を犯して、御前に墮落してしまいました。その後、神である主は、

おまえが、こんな事をしたので、

おまえは、あらゆる家畜、

あらゆる野の獣よりものろわれる。

おまえは、一生、腹ばいで歩き、

ちりを食べなければならぬ。

わたしは、おまえと女との間に、

また、おまえの子孫と女の子孫との間に、

敵意を置く。

彼は、おまえの頭を踏み砕き、

おまえは、彼のかかとかみつく。

という、「蛇」の背後にいるサタンに対するさばきの言葉をとおして約束して、

「女の子孫」の「かしら」である贖い主を約束してくださいました。

一連のトレードト句によって導入される十一の記事を貫いている中心主題は、この、「女の子孫」の「かしら」である贖い主による救済の御業の歴史です。

このような、贖い主の約束に基づいて、展開する主の贖いの御業の歴史を「救済史」と呼びます。

ただし、このような一連のトレードト句によって導入される記事の関係だけではすべてを説明しきることはできません。これらすべてを包んで、神である主の創造の御業と救済の御業を統一的にまとめているのは、「神である主の契約」というテーマです。

一連のトーレドト句によって導入される十一の記事を貫いている中心主題が「女の子孫」の「かしら」である贖い主による救済の御業の歴史であるということは、その、救済の御業の歴史が、霊的な戦いとしての意味をもっていることを意味しています。それは、

初めに、神が天と地を創造した。

という言葉によって導入される一章一節―二章三節に記されている天地創造の御業をめぐっての霊的な戦いです。サタンは、神さまの創造の御業の目的をくじこうとして働きます。これに対して、「女の子孫」の「かしら」である贖い主は、罪によって墮落した主の民を回復し、創造の御業の目的を達成してくださるためにお働きになります。